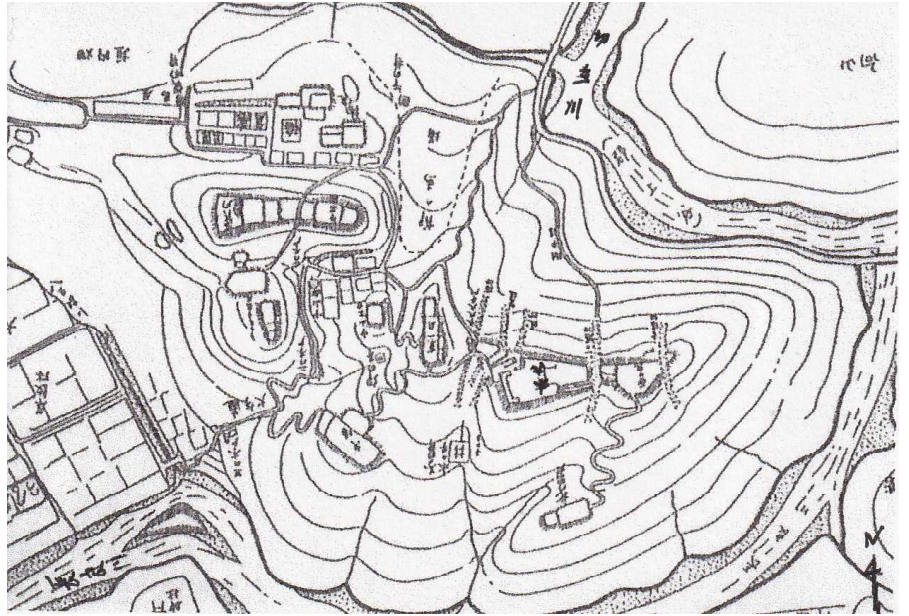


## 鷲見城跡の観光利用の提言

↓  
北

鷲見城は阿千葉城、篠脇城などと同じ山城で、麓の居館などと防御施設の山城で構成された、砦のようなものであったと考えられます。

鷲見城は、鷲見氏が築造した城で、その創建年代にはいろいろな説があります。鷲見大鑑や濃北一覽に出てくる鷲見退治で有名な藤原頼保が永暦年間(1171)に築城したという説、頼保の孫の家保が建長5年(1252)に築城したという説、さらにもう一説には承久の乱の頃、美濃国を舞台に戦闘が繰り広げられていたためその頃に自衛のため築城されたという説があります。築城された鷲見城は海拔650m、麓の居館跡から95mの城山山頂にあり、右図の縄張り図のよう



鷲見城址縄張り図(林春樹作図)

に北側が長良川、西側には切立川、東側には八百僧谷川が流れ、東方の山脈は位山分水嶺に繋がり、南東側には鷲ヶ岳がそびえる天然の要害にあります。さらに城山の鷲見城は鷲見郷の向鷲見村、正ヶ洞村、中切村、穴洞村、鮎走村や飛騨街道にあった番所や旅人が通る植松峠から見え、麓には白山神社を置くなど聖域として位置づけていたと思います。

令和6年6月15日(土)に高鷲文化財保護協会の研修会として城山の鷲見城址を調査しました。その時には多くの方々が参加され充実した調査会になりました。

この調査会の資料を基に令和6年7月10・11日と役員会を開き、下記のように鷲見城跡を利用して観光地化は出来ないだろうか話し合いました。

- ・本丸・西の丸・見晴台付近の立木の伐採(上図中央)
- ・館跡には館跡案内看板を設置する(上図左)
- ・大手道入り口とICアクセス道路の途中に鷲見城登山口に鷲見城遺跡の案内看板とウーオーキング案内看板を立てる(上図左下)
- ・その他故山田幸男先生が高鷲村教育委員会在職中に建てられた標柱や説明板の補強
- ・本丸大手門の修繕(上図中央)
- ・本丸と西の丸にある濠の上に木製の橋を架ける(上図中央右)
- ・その他



鷲見城址を整備して高鷲の観光地にできないか

松の立木がある本丸跡地

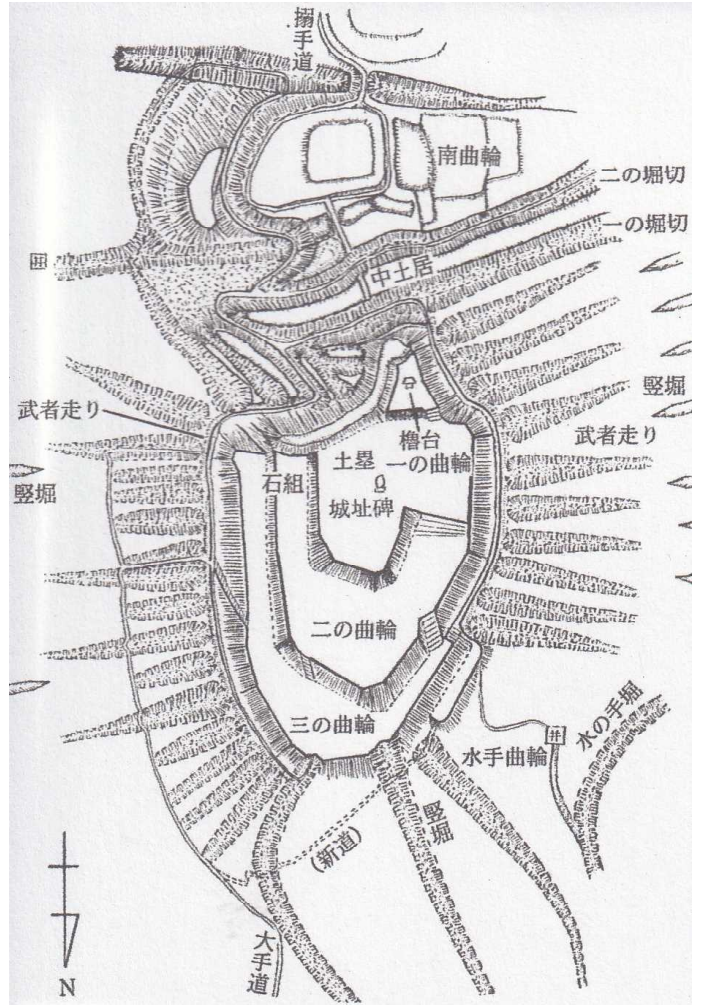
# 東氏の篠脇城跡と館跡が国指定史跡

文化審議会は6月24日、各務原市の「坊の塚古墳」と郡上市大和町の『東氏館跡・篠脇城跡』を国史跡に指定するよう文部科学大臣に答申した。指定されると県内の国史跡は31件になる。

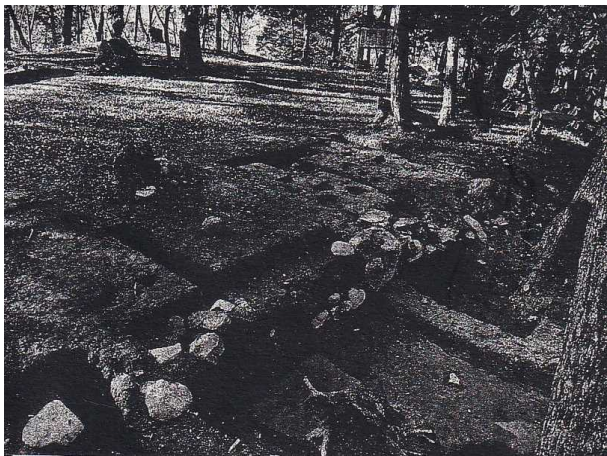
『東氏館跡・篠脇城跡』は、室町幕府の奉公衆の東氏が15世紀前半頃構えた館跡と背後の篠脇山(486 m)に築いた山上居館と東氏撤退後に城郭化された城跡である。図に示したように土塁などの防御施設の残存状態が良好で、地元有力者の居所が山麓から山上へ変遷する過程が分かる。

15世紀中頃以降に東氏により、栗巢川左岸に園池や礎石・掘立柱建物などを配した館が建設された。館は16世紀前半の火災で廃絶し、篠脇山頂周囲を堀で囲い園池や礎石建物を構える山上居館が築かれ拠点に移った。供給に用いられた土師器皿や、青白磁などの高級陶磁器類が出土し、山上の居館として機能していたことが分かる。

16世紀中頃、東氏が撤退した後に、山上の主郭は園池が埋め立てられ出入り口がふさがれるなど、居館としての機能がなくなり、主郭の周囲に切岸と畝状空堀群が取り囲み、南方の登城に対する堀切などを持つ堅牢な城郭に再構築された。



篠脇城縄張り図(林春樹作図)



(岐阜新聞 6月25日朝刊より)

現在ここには、東氏一族の居館で国名勝東氏館庭園がある。九代目東常頼が古今伝授の祖と言われたことから、一帯には和歌・短歌をテーマにした複合施設『古今伝授の里フィールドミュージアム』がある。

なお、『東氏館跡・篠脇城跡』の国史跡指定は令和6年11月からです。

庭園を備えた山麓の居館から山上へ移り、発達した山城の造営という。15世紀中頃から16世紀中頃に掛けての郡上北部の有力国人鷲見氏が没落した後の郡上の国人クラスの武家拠点の変遷が分かり、美濃国北部を巡る政治勢力の様相を知るための重要な遺跡である。



国名勝東氏館庭園(古今伝授)短歌募集パンフより)